

# 中国農民の農外就業モデルと農村社会における付き合いの「負担」 —— 湖南省常德市G村・T村の比較分析 ——

馮 川

## はじめに

中国の農村社会における「付き合い」の特徴を把握し、それに基づいて農村社会の全体的構造を捉えようとする研究には豊富な蓄積がある。福武直<sup>ただし</sup>（1917-89）は中国の農村社会における付き合いの封鎖性とその背後に存在する社会関係の累積性に注目し、「多少とも自足的な地域社会であり、日常的接触の最大圏であり、大部分の生活欲求が満たされ得る最小圏である」<sup>(1)</sup>という、中国農村における集団社会関係の構造的性質を指摘した。その他、福武直の考え方を継承し、農村の付き合いによって形成された経済圏、生活圏に目を向けた古島和雄（1921-2004）の「農村集市市場」に関する研究<sup>(2)</sup>、河地重蔵<sup>かわちじゆうぞう</sup>（1928年生）の「小地方市場圏」に関する研究<sup>(3)</sup>なども看過できない。

付き合いから生じる中国社会の「関係」を基点とする研究に対して、費孝通（1910-2005）が提示した「差序格局」は重要な概念である。異なる「己」を中心として同心円状に広がり、「あたかも水の波紋のようであり、一輪ずつ拡散するにつれ、遠くに広がれば広がるほど薄くなっていくようなものである」<sup>(4)</sup>という比喩で表された「差序格局」は、理念型としての「郷土社会」の社会構造の最も基本的な特性を言い当てている。「郷土社会」とは、「そこで生まれ、そこで育ち、そこで死ぬ」社会である。その社会での人口の流動性は極めて低いため、幼いころから継続して互いに接触する中で、自ずと親密な人間関係と「われわれ意識」が醸成される。ここから、「郷土社会」の互いに熟知した人間同士では、「おれたちはみんな顔馴染みだ。声をかければそれでいい、多くを語る必要は何もない」<sup>(5)</sup>という間柄が形成される一方、「地縁が血縁を離れて意味を持っていない」<sup>(6)</sup>という村落における付き合いの閉鎖性と排他性も生じる。

熟知した間柄からもたらされた「差序格局」と「顔馴染み」社会という費孝通の考え方を継承しながら、陳柏峰は、村落における付き合いの「親密感」を中核的要素として、村民が「われわれ意識」から生じる他から孤立したテリトリー（「圈子」）を持って日常的な付き合いを展開する論理を「郷土論理」という概念にまとめた<sup>(7)</sup>。村落における農民<sup>(8)</sup>の付き合いの内面では、「親密感」の格差がある。そのため、「われわれ意識」に基づく「われわれ感」も均質的なものであるとは限らない。費孝通が指摘した「差序格局」の同心円状の構造を模倣し、楊華は「自己人（「われわれ感」の圏内にある人、顔馴染みの人）— 熟人（顔見知りの人）— 陌生人（見知らぬ人、赤の他人）」という同心円状の構造を用いて「親密感」の格差序列を表現した。「親密感」と「付き合いの原則」との関係について、楊華は「自己

人——「人情」の原則，熟人——「面子」の原則，陌生人——「自己利益」の原則」という組み合わせを指摘した<sup>(9)</sup>。さらに，宋麗娜はフィールド・ワークから得た江西南部・遼寧東部・山東東部の三つの農村のマイクロ・データを採用し，村落における同族関係の勢力と規模を指標として，「親密感」の格差序列を中国内部の地域比較の視野において考察した。結論としては，「われわれ感」が感じられる付き合いの範囲と付き合いの原則との組み合わせを，

- ① 南方地方の宗族——「人情」<sup>(10)</sup>の原則
- ② 東北地方の「堡子」という地域コミュニティ<sup>(11)</sup>——「われわれ感」があるかどうかによって「人情」の原則あるいは「自己利益」の原則を二者択一
- ③ 華北地方の小家族——「恨みを買わない」の原則<sup>(12)</sup>

という三種類に分類した。

「親密感」の発生過程を動的に考察すれば，付き合いの社会的機能もより明瞭に理解される。他方，形成した「親密感」を維持する場合には，付き合いをきっかけに，人々が互いに継続的に接触し，互いに熟知した感覚を保っていくことができるようになる。付き合いによって，人間関係が強固になり，または修復されるような事例も多数ある。大雑把に言えば，付き合いには二つの機能がある。第一に，社会統合である。付き合いそのものは，互いに情報や話題や資源が共有され，言語のレベルを超えた確かな連帯感が生まれる過程である。

第二は，人間関係の再生産である。農村社会における付き合い，特に贈与に関わる付き合いで，モノの移動の一時的な一方通行性もたらす，贈与者とそれを受け取る側の感情的「エネルギー」の不均衡性こそが，まさに双方にやりとりを継続させるメカニズムと言える。一方通行的にモノが移動する時点と，それに対する反対贈与が行われる時点との間には一定の時間の開きがあるにもかかわらず，与える側は反対贈与によって受ける側に転換する可能性を想定することで，長期的な社会関係を創出・維持できるようになる。

閻雲翔 Yan Yunxiang (1954 年生) による中国社会の贈与交換についての研究をはじめ，中国社会における贈与物の文化的意味と交換の文化的特質を描き，分析する研究は少なくないが，贈与交換を付き合いのメカニズムの一環として，それがどのような経済的・社会的結果を家族にもたらすのか，という問いの下で検討しようとする研究はまだ見られない。例えば，閻雲翔の著作の中で，贈り物を受け取る荣誉と贈り物を贈る競争に関する分析は，贈答交換に伴い私的関係のネットワークが広がるというポジティブな役割に注目しているが，それが家計の負担を生じさせるというマイナスの機能についてはほとんど論及されない<sup>(13)</sup>。また日本の農村社会においても贈答文化が顕著であるが，日本農村社会の組織構造，例えば経済協同組織としての同族団における「本家」と「分家」との間に存在する「庇護一奉

仕関係」という主従関係は、贈答交換における競争を制限する役割を果たしていた<sup>(14)</sup>。そこで、民俗学と文化人類学の視点から、贈与現象の要素の一つとしての贈り物の属性（例えば、物質的贈与と非物質的贈与、物品の贈与と貨幣の贈与など）とそれが内包している社会的意味に光を当て、贈与交換における「均衡」に注目する日本の研究は多数ある<sup>(15)</sup>。

しかし、中国農村の経験を見ると、農民が贈答交換を「負担」と捉え始める現象は、特に2000年頃から普遍的かつ深刻な問題となってきた。日本の贈答慣習に関する研究においても、贈与交換を農外就業モデルと関連させ、贈与をはじめとする付き合いの「負担化」を問題意識として分析したものは、管見ではまだ見当たらない。中国の研究でも、現在の農村を横断的に比較して「人情」と「面子」に関する状況を描いた研究は多数あるが、農民自身が言うところの付き合いの「負担」の歴史的変遷、また本稿が行うような農民の農外就業モデルとの関連で村落における付き合いの「負担」を分析するような研究はまだ見受けられない。

本稿は、中国の農村社会での農民の付き合いに関する諸事象に焦点を当て、中華人民共和国建国以来、農民の付き合い方の変遷とその「負担化」、特に農外就業モデルと農村社会における付き合いの「負担」との関係を考察するものである。農民らの「負担」に関する日常的な会話から筆者が得たヒントに基づき、本稿は、何かを「超過する」ことが「負担」を生み出すという因果関係を想定し、付き合いがもたらした「自身が有する生産能力を超過する消費の要請」に「負担」の根源を求める。

行為の頻度を基準として、本稿は農民の付き合いを、「日常的な付き合い」と「非日常的な付き合い」という二種類に大きく分類する。通過儀礼<sup>(16)</sup>の場面での儀礼的な付き合いなど、年に数回行われる付き合いは「非日常的な付き合い」である。また本稿では、農村社会という行為の受け皿の地理的位置を指標として、「都市近郊に位置する農村」と「遠隔地に位置する農村」という分類を採用する。ここから、個別農家の農外就業が盛んに行われた際に、二つの農外就業モデルが生じる。それに加えて、人民公社時期（1958-83）の集団的な農外就業は、三つ目の農外就業モデルであると言える。本稿が関心を集中するのは、農民の農外就業モデルと農村社会の付き合いとの関係である。

ここでは、本稿の分析対象となる農村の概況を紹介しておきたい。

「都市近郊に位置する農村」の事例については、2013年7-8月に筆者自身が湖南省常德市武陵区のG村で得たフィールド・データが取り上げられる。G村は常德市の南西部に位置し、人口は2,637人（2013年）、面積は1,300畝（1畝は約6.7アール）である。市の中心部から9キロメートルほどしか離れていないため、現在のG村村民は常德市で賃金労働者として自宅から通勤することが可能である。

G村の事例と対比するため、本稿は湖南省常德市桃源県におけるT村を「遠隔地に位置する農村」として、华中科技大学中国鄉村治理研究中心（中国農村ガバナンス研究センター）の『調査資料集』が収録したその村に関するフィールド・データを取り上げて分析したい。

T 村は桃源県の北西部に位置し、12 の村民小組<sup>(17)</sup>、308 世帯、1,051 人、1,348 畝の耕地面積（2013 年）から成っている。市の中心部から 47 キロメートルほど離れているので、多数の T 村村民は中国東南部の大都市に出稼ぎに出、春節（旧暦の正月初一の前夜一週間）、清明（旧暦 2 月後半から 3 月前半）の期間にのみ、一時的に帰郷する。

以下の第一節では、G 村の事例に基づき、人民公社期の農村社会における農民の付き合いを検討する。第二節では、G 村と T 村の事例を対比して、農村社会での儀礼的な付き合いと余暇生活の付き合いを分析する。第三節では、農民の農外就業モデルと農村社会における付き合いの「負担」との関係を検討したい。

### 第一節 集団的な生産の「亦工亦農」制と農村社会の付き合い

「土地改革」<sup>(18)</sup>後の個別農家、特に貧農らは、耕作に必要な家畜、農具等を所有しない者が多く、生産量の急激な増大にはわかには望めなかった。さらに、旱害、水害、病虫害等の天災に対しても、従来の零細な経営は極めて無力であった。他方で、重工業への集中的な投資を志向する国家の側も、農村の大量の労働力を動員して農業生産に向かわせる強い<sup>(19)</sup>意志を持っていた。こうした状況下で、個別農家の零細性を脱却するために編み出された互助の仕組みは、互助組から始まり、初級合作社から高級合作社へと集団化<sup>(20)</sup>を進めていき、最後は人民公社に至った。それに付随して、「亦工亦農」の集団的な生産制度も生み出された。集団的な生産が中心となった人民公社期の農村社会において、農民の付き合いは日常のこととして、必ずしも「負担」とは感じられていなかった。

「亦工亦農」制とは、農繁期に農業、農閑期に非農業に就業するいわゆる兼業形態を示す概念であった<sup>(21)</sup>。すなわち、「亦工亦農」制を兼業の問題として考えるならば、農業に季節的な労働力の過不足現象がある限り存続するとも言えよう。非農業労働力が農村から完全に離脱して商品食糧の枠が拡大するのを防ぐため<sup>(22)</sup>、農民の集団的な農外就業は一般に末端の生産隊に限定された。

人民公社期の生産隊は、生産をめぐっての日常的な付き合い圏をさらに広げて、付き合いの頻度も増幅していた。G 村を例とすれば、この時期に生産大隊は公共食堂を開設したうえに、それと整備するために集住する居民点<sup>(23)</sup>が配置されて、ほぼすべての社員が集団によって建てられた宿舍式の集合住宅に入居した。食堂と居民点は、各農家の生活リズムを統合するうえで重要な役割を負われ、「組織を軍事化し、生活を集団化する」ことを推進した。また 1962 年には居民点と常設の公共食堂は廃止されたが、生産隊は依然としてかなり強い動員力を保っていたため、社員はほとんど毎日、労働の任務を割り当てられ、日々の野良仕事や農田水利建設などの集団的農外生産に従事させられていた。

毎年、公社では旧正月のみが休暇となった。休みは旧暦の 12 月 28 日または 29 日から始まる。日常語では「開門紅」と呼ばれる翌年正月の三日目に、社員たちは労働に戻らなけ

ればならないので、年始の親戚まわりをする時間もなかった。人々は一緒に鋤を担いで野良仕事に出かけたり、仕事を終えて一緒に食堂で食事をしたり、労働する時も助け合って土や煉瓦を運んだり、仕事をしながら雑談したりして、親密な同業者集団になっていた。社員たちが接触する機会は生産の局面に限定されたので、集団的な生産労働とそれに奉仕する集団的表彰大会が農民の日常的な付き合いの空間となっていた。

生産制度の配置に現れた国家の権力は、どちらかと言えば、G村の農村社会における年齢の差異と従来の血縁関係に基づく付き合いの親密感から成っていた「差序格局」の空洞化を加速した。G村の宗族勢力はそもそも強くなかった故、農民の業縁関係に基づく付き合いの同心円状構造が急速に作り上げられ、しかもその付き合いの「圏（ネットワーク）」の統合度が従来の血縁に基づく付き合いの関係を越えてきた。同族団体の弱体化により、生産隊の再編に伴う業縁関係の再編は、農民の日常的な付き合いに多大な影響を及ぼしたのである。G村では1970年代以降、第2生産隊が解体されて二つに分割され、それぞれ第1生産隊・第3生産隊に編入された。居住区の物理的な配置は相変わらずであったが、集団的な生産のための業縁関係は再編成されたので、日常的な付き合いの範囲にも変動が生じた。加えて、日常的な付き合いに付随する儀礼的な付き合いの範囲も、新たな業縁関係に重なるようになった。

いずれにしても、付き合いの空間的構造から言えば、人民公社時期、農民の「農外就業に基づく付き合いの範囲」、「集団的農業生産に基づく付き合いの範囲」、「日常的な付き合いの範囲」、「儀礼的な付き合いの範囲」という四つの範囲は重複していた。また農民の日常生活では、生産をめぐる「日常的な付き合い」がその時期の主たる形態であり、消費志向の「儀礼的な付き合い」は当時の「社会主義倫理」のイデオロギー及び食糧統制<sup>(24)</sup>によって抑制された状態にあった。それ故、生産志向の「日常的な付き合い」に比べ、消費志向の「儀礼的な付き合い」は従属的な位置に置かれていた。ただし、付き合いが広がっていく時系列から言えば、そもそも同族関係の凝集力が強くなかったG村においては、「生産圏（集団的な生産の業縁集団）→日常的な付き合いの圏→「人情」の圏」という順序を辿る。

G村の農民らは、当時、集団的農業生産と非農業生産のスケジュールがびっしりと詰まっていた、隙間がなかったと今でも鮮明に記憶している。酒席を設けたとしても調達できる食糧はごく少なかったのも、村民（当時社員）たちは公開の場で通過儀礼を行うことが極めて少なかった。ひいては、伝統的な「魔除け」という機能があるとされる通過儀礼さえも取り消された事例が多かった。1962年以降、生産状況は徐々に好転してきたので、農村社会の公開の場で行われる通過儀礼もようやく回復し始めた。聞き取りを行った際、当時の様子を述べる村の老人は、しばしば当時の人間関係に存在した、血縁関係に基づかない「肉親の情（親情感）」について筆者に語った<sup>(25)</sup>。通過儀礼に現れた、血縁関係に基づかない「肉親の情」は、業縁関係に基づく日常的な付き合いから生じたものと考えら

れる。当時の共産主義志向の「社会主義倫理」に基づく「儀礼的な付き合い」は、「生産の互助」という生産志向の付き合いの延長線上において理解することが望ましい。つまり、「儀礼的な付き合い」は「生産の互助」という生産志向の付き合いの一部分となっていた。通過儀礼を行う際、互助圏にある生産者同士が宴席の準備を互いに手助けすることは、集団的農業・非農業生産における互助が自然な形で転化を遂げた結果であると言える。通過儀礼に関与した村民同士が主催側の小家族に贈呈する祝い金と贈り物は、「生産の互助」という役割を果たしていたとも言える。

以上を要するに、人民公社期の「亦工亦農」制は、農村社会における農民の日常的な付き合い・非日常的な付き合いを全て、集団的な農業・非農業生産の関係に組み入れたのである。消費志向の付き合いは生産志向の付き合いに従属したので、農外就業を含む集団的な生産はあくまでも生産者同士の連帯感を強める働きをし、そのため付き合いを「負担」視する農民はなかった。

鄧小平時代(1978-97)の幕開けとともに人民公社は解体され、戸別経営制が復活した<sup>(26)</sup>。これに伴い、農村社会における農民の付き合いは、人民公社期に形成された集団的な生産の「業縁関係」を消失し、再編成の時期を迎えた。この時期、農民の集団的な農外就業に代わって、小家族の兼業経営を背景とする家族構成員の個別的な農外就業が徐々に盛んになっていった。

人民公社期において、非農業労働力を末端の生産隊から遊離させない「亦工亦農」制は、農民の日常的な付き合いを生産における付き合いと重複させる働きをしたので、個別農民を取り巻く付き合いから生じた「業縁関係」と「親密感」は、ほとんどが農村社会の内側に累積していた。だが、人民公社解体後に勃興してきた個別農家の農外就業は、多数の非農業労働力が農村社会から遊離する結果をもたらした。そして、個別農家の農外就業に従事する農民の、新たに再編成された「業縁関係」は、農村社会からはみ出すものだった。生産志向の付き合いが村の外部に拡張されてから、農村社会に残っていたのは、これまでの従属的地位から転じてやや自律化した消費志向の付き合いであった。ここで、消費志向の付き合いが増大し、消費の要請が経済的生産の能力を超えるようになると、消費志向の付き合いは初めて農民の「負担」と化するのである。

ただし、「個別農家の農外就業」についてはこれをさらに細かく分類する必要がある。本稿は農外就業のための移動期間によって、① 毎日から通勤する形態、即ち「通勤兼業」と、② 季節的に帰郷する形態、即ち「出稼ぎ」<sup>(27)</sup> という二つのタイプに分ける。個別農家の農外就業モデルの差異は、農村の置かれた物理的・空間的条件に関わっている。具体的に言えば、「都市近郊に位置する農村」における農民は「通勤兼業」の形態が多く、他方で「遠隔地に位置する農村」における農民は「出稼ぎ」の形態に属する場合が多数ある。個別農家の農外就業形態の違いが、農村社会の付き合いの形態の違いを生むのである。

以下は、生産志向の日常的な付き合いが村外に転出した後で、農村社会になお残されて

いる①儀礼的な付き合い、②余暇生活の付き合い、という二つの領域に関するフィールド調査の事例をまとめ、個別農家の農外就業モデルと農村社会における農民の付き合いの形態との関連を具体的に検討したい。

## 第二節 農村社会における付き合いの「負担」

### 1 儀式の主催と「負担」：経済的实力との分相応 vs. 自己顕示

中国の農家においては、疾病などの不安を克服するため、あるいは新しい役割や身分を獲得しながら成長を遂げることをコミュニティに認めさせるために、多種多様な通過儀礼や宴会を主催する慣習がある。

多数の村民の農外就業形態が「通勤兼業」であるG村においては、通過儀礼の主催は農家の経済的实力を限度にして行われる。農家は経済的实力によって、3歳・6歳・9歳・36歳・50歳・60歳・70歳のお祝い、棟上げのお祝い、または考学宴（トップレベルの大学に合格したことを祝う宴会）を任意に選択することが許される。ここから、G村における儀礼の主催は農家の「実力相応の自己顕示」であると言える。筆者がインタビューしたある村民は、「孫は今年9歳になった。最初の満月酒（生後満1か月を祝う宴会）は主催したが、そののちは、3歳、6歳、9歳の誕生日を含めて、何の儀礼も主催しなかった。それだけの実力が伴わないので、主催しない<sup>(28)</sup>」と語った。この証言によって、主催側の村民自身が、儀礼の主催に関する経済的な負担を制御する主導権を持っている点が明らかになるだろう。

儀礼を主催する際の「実力相応の自己顕示」という特徴は、「拱」という儀礼の道具に対するG村の村民の処遇方式にも明らかに見られる。

「拱」gǒngとは、送風機で円柱状の袋に空気を送り込むと弓状に膨らみ、村道を跨ぐ形で展示される儀礼用品である。赤色の「拱」の表面に祝賀の文字を印刷するという方法は、当初は商業的宣伝のため、開業式典などの際に、都市部での商店経営者らによって行われるものだった。このような儀礼用品が農外就業者によって都市部から農村社会の儀礼にも持ち込まれるようになり、村での冠婚葬祭に用いられたために、赤色の「拱」のほか、金色や黒色の「拱」も見られるようになった。儀礼に参加する親戚や知人は、レンタルビジネスの経営者に料金を支払って「拱」と関連設備（送風機など）をリースし、主催側に「贈呈」（実は一時的な賃借り）する。

G村の場合、主催側が親戚や知人から贈呈された「拱」を村道に並べて置く習慣は、2009年頃から盛んとなってきた。今では主催側は、儀礼の場所としての家屋に通ずる村道の上に、平均して5-8個の「拱」を置くのが普通である。「拱」の表面には、儀式の内容、「贈呈者」の氏名や主催者との関係などが印刷されている。村民の目から見れば、「拱」は儀礼場所の案内、儀礼内容の説明、主催者のネットワークの提示、儀礼の雰囲気作りなど、各方面において役割を果たしている。



図 1：湖南省の農村における結婚式の「拱」

出所：左側：長沙新聞網（2013 年 2 月 19 日 <http://news.changsha.cn>），2014 年 6 月 28 日閲覧。右側：鳳凰湖南網（2013 年 5 月 27 日 <http://hunan.ifeng.com>），2014 年 8 月 13 日閲覧。

小学校の退職教員である村民の黄 HY は、2010 年に 1 万元を投入し、各種の「拱」と関連設備を購入したうえ、自宅で「拱」のレンタルビジネスを始めた。黄 HY の経営状況によれば、「拱」一つのレンタル料金は一日当たり 100 円で、使用期限は三日間である。また主催側は、村道で「拱」に電力を提供する複数の農家に電気代を支払う必要がある。

重要なのは、主催側は「拱」を受け取ることによって、わずかな電気代の負担以外にも、今後「贈呈者」が主催するであろう儀礼に参列し、逆に「拱」を「贈呈」する義務が生じるという点である。G 村の村民は物価の引き上げなどの要素を念頭において、小家族の経済的実力に基づき、一部の親戚や知人に対しては「拱」を「贈呈」しないように説得することで、未来の儀礼的な付き合いの「負担」を制御しようとする。

この点に関し、黄 HY に対する聞き取りにより、以下の情報が得られた。

世帯主	儀礼時期	儀礼内容	「拱」数	備考
黄 RH	2011 年 4 月	父親の 70 歳誕生日	5	父親は次世代に負担を掛けないため「拱」を受け取りたくなかったが、世帯主は親不孝の不評を買う恐れがあるので、父親を説得した上で 5 個の「拱」を受け取った。
姚 JG	2012 年 1 月	息子の結婚式	6	直系親族の「贈呈」。
姚 HF	2012 年 3 月	息子の結婚式	9	直系親族、縁者の「贈呈」。
	2012 年 11 月	孫の満月酒	1	年内に二つの儀礼を主催するため経費を節約したかった。主催側は儀礼内容を説明する 1 つの「門面拱」を自らレンタルした。
鄧 SS	2012 年 9 月	娘の結婚式	11	直系親族、縁者、一部知人の「贈呈」。

表 1：G 村村民の「拱」の数の制御

出所：筆者作成



高齢者に関するお祝いの担い手は、次世代の息子の家庭である。[表1]の黄RHの事例では、「拱」の数量についての高齢者の態度は、次世代の経済的実力と、次世代が高齢者に多少とも「拱」を受け取るよう説得する力に強く関連している。2011年、村民楊WQの90歳の誕生日に、1,500メートルの村道が50余りの「拱」に覆われた光景を目にしたことのある村民は、「拱」に従ってずっと歩いていけば、主催者の家に着けた<sup>(29)</sup>と述べた。また2012年村民鄧WTの70歳の誕生日には、村民委員会の所在地から家屋の前まで500メートル余りの村道に数十個の「拱」が並んだ。村民楊WQと村民鄧WTの息子は、それぞれ常德市で工場とホテルを経営している。このように、村道が「拱」に埋め尽くされる風景も稀には見られるが、いずれにしても、G村においては儀礼の主催者は自身の経済的実力に基づいて儀礼を主催するのが原則となっている。

G村の事例と著しい対照をなすのが、遠隔地に位置するT村である。同村では多数の村民は出稼ぎを行っている。近年、T村で儀礼の主催コストはますます高くなりつつある。宴席では主催側が赤い袋を用意し、それぞれの参列者に配ることが慣習となっている。赤い袋の中身は、煙草、牛乳などである。「3年間の間に、煙草の等級は一箱当たり5元のブランドから、9元、22元のブランドを経て、今は32元のものになった。」<sup>(30)</sup>2012年末、主催側が一箱当たり32元の煙草を用意するために、1万円を使った事例も見られる。なぜなら、「高い等級の煙草を配れば、他人よりもっと高い面子を得られる」<sup>(31)</sup>からだ村民の趙SDは語った。儀礼の主催をきっかけに、面子のために競い合うのがT村の常態である。

ここでは、T村における「拱」に関する事例を取り上げて、前述したG村の「実力相応の自己顕示」を特徴とする儀礼の主催と対比したい。

T村の儀礼に見られる「拱」の様式は、G村より一層多様である。弓形円柱状の「拱門」の傍に置く「獅子」、「麒麟」、「象」など縁起物の動物をかたどった「拱」も、「拱門」と組み合わせでレンタルできる。レンタル料金はG村とほぼ同じであるが、「拱」の数量については、G村で個別の事例にすぎなかった村民楊WQと村民鄧WTの状況が、T村では常態となっている点が大きく異なる。

T村の村民は、一般に「出稼ぎ」をするので、旧正月の直前には多数の村民の「返郷潮」(帰郷者の波)が見られる。このため、農村社会における儀礼的な付き合いは、この期間中に突如としてラッシュを迎える。村民によれば、「拱」が儀礼用品として現れたのは、2008年頃である。「拱」に関してG村とは異なっている様子が、以下の[表2]からも分かる。

前出したG村と同じように、「拱」が使用されるのは、結婚式、誕生日など一見して互いに異質な儀礼の期間である。しかしながら「拱」の数量に着目すれば、農外就業を行う若年世代の経済的状況と付き合いの人間関係が浮き彫りになる。「拱」の数量に注目することで、異質な儀礼を互いに比較することができるようになる。その視点をうけると、T村で見られる「拱」の数量をめぐる競争の度合いは、G村と比較して顕著に高いことが分かる。

世帯主	儀礼時期	儀礼内容	「拱」数	贈呈者
劉DY	2009年2月	息子の結婚式	9	直系親族
劉GR	2010年1月	本人の結婚式	14	直系親族、縁者
楊H	2010年2月	親父の60歳誕生日	16	直系親族、縁者
李CB	2010年2月	息子の結婚式	23	直系親族、縁者、一部の知人
劉JS	2010年12月	息子の結婚式	27	直系親族、縁者、一部の知人
李L	2011年2月	本人の36歳誕生日	30	直系親族、縁者、一部の知人
張QR	2012年1月	本人の結婚式	30	直系親族、縁者、一部の知人
楊YD	2012年12月	本人の結婚式	35	直系親族、縁者、一部の知人
劉XH	2013年1月	息子の結婚式	38	直系親族、縁者、一部の知人

表2：T村における「拱」の数と村民の「自己顕示」

出所：華中科技大学中国郷村治理研究中心『調査資料集』に基づき筆者作成

「皆は互いに競って「拱」を並べる。他の人より自分の「拱」が多い分だけ、余計に「面子」があるように感じる。」<sup>(32)</sup> それで、上表のデータが示すように、儀礼における「拱」の数量はますます多くなった。関係者を動員して主催する儀礼に「拱」を「贈呈」する村民は少なくない。その他、「拱」の数を増やすため、主催者が自身の経済的実力を顧みないで、「拱」をレンタルする事例も散見できる。

要するに、儀礼の主催に見るG村とT村の差異は著しい。G村の村民は経済的実力との分相応を重視するので、「拱」の数量を制限することによって、儀礼的な付き合いの「負担」を制御できるようになる。しかし、T村の村民は自己顕示を重視するので、「面子」を象徴する「拱」の数の増加を追求するために、経済的な実力とネットワークの境界を超えることから生じる、ますます重くなる付き合いの「負担」を負うことを余儀なくされる。「付き合いの中で、勝手気儘なことは許されない。人が生きるうえで、「面子」はどうしても必要だ。それは私にとっても「負担」と言えるが、他の者より優れていると皆に思われたら、やはり嬉しいではないか」<sup>(33)</sup> と、T村の村民は語った。

## 2 儀礼的な付き合いの「負担」軽減策

### (1) 負債意識 vs. 「債務を以て債務を返済する」意識

今回の儀礼の参列者は、次回の儀礼で主催者となるのと同様、今回の儀礼の主催側は、次回の儀礼の参列者となる。儀礼への参列そのものは、主催者に「人情債」をもたらす過程であると言える。具体的に言えば、参列者が「贈呈」する「御祝儀」と前述した「拱」は、主催者の「面子」であると同時に「債務」でもある。ここで、儀礼の主催を「負債」

(返済の義務感に重点) と見なすのか, 「借金」(借入の能動性に重点) と見なすのかによって, 異なる二種類の主催意識が生じる。

G 村においては, 負債意識の下に, 参列者の「贈呈」数量を一定の水準に制御するのが主催者の原則であった。先述した「拱」の数の限定以外に, 「御祝儀」の金額も 500 元を限度に設定されていた。「人情債」をため込まないほうがいい。「人情債」が最後に, 制御不可能になるのは最悪だ<sup>(34)</sup> という意識を持って, G 村の村民は儀礼的付き合いの「負担」を制御していた。

それに対して, T 村における一部分の村民は, 儀礼の主催を「負債」(いつか返すという考え方) と見なさず, それを「借金」と見なすようになった。「三年間のうちに儀礼を主催しなければ, 貧乏人になってしまう」<sup>(35)</sup> という証言に見られるように, 「債務を以て債務を返済する」という儀礼の主催意識は, T 村の一部分の村民が, 制御不能となった付き合いの負担に直面した結果生み出した, 自己救済の方策であると言えるだろう。

それでは何故, 三年間で儀礼を主催しなければ, 貧乏人となる恐れがあるのか。それは, 儀礼の主催 (=新規債務=借金) によって受け取る「御祝儀」の金額が, これから三年間の期間中の儀礼参列 (=古い債務の返済) に対しては十分であるが, もしその期間に度々行う「古い債務の返済」を除いて何の「借金」もしなければ, 資金不足のため「返済」の方が不可能になる恐れがあるためである。そこで, T 村の一部分の村民は, 限られた帰郷の期間を積極的に利用し, 多種多様な理由を設定して儀礼的な付き合いの機会を作り出すことによって (=新規の債務を以て), 次回, 次々回の儀礼に参列する際に「古い債務を返済する」。

従って, T 村において季節的にラッシュを迎える儀礼の場面では, それぞれの村民たちは「新規債務」あるいは「債務返済」のために忙しく走り回るのである。

## (2) 寄贈者名簿 vs. 招待状

G 村での村民にとり, 結婚式や葬式の名簿管理は必要不可欠である。儀礼の主催側は, 儀礼の直前に, 村外の親戚と農外就業により知り合いとなった村外の友人に招待状を配布する。ただし, 村民小組の構成員<sup>(36)</sup> や村内の友人に招待状を配ることはしない。村民小組の構成員や村内の友人が, 寄贈者名簿に基づいて祝儀の金額を決めたり, 出席するかどうかを決めたりすることは, G 村では一般的に見られる慣習である。その慣習は, 上述した G 村で見られる「負債意識」と関連している。G 村の村民は, 負債は返済しなければならないので, できるだけ負債を制限する, という考えに従う。

また寄贈者名簿がある場合, 礼儀的な付き合いは「負債—返済」という自己閉鎖的な過程を前提として展開する。「自己閉鎖的」というのは, 名簿に記入してある祝儀 (=「債務」) の金額と, 記入した人が儀礼に参列する際に贈呈する祝儀の金額とが等しいことを指す。物価に基づく祝儀の金額の調整は, 一つの付き合いのサイクルが終了してから行われる。つまり「寄贈者名簿」と, それに内包される「負債意識」や付き合いのペースの自己制御

は、儀礼的な付き合いの負担を制限する役割を果たしている。

それに対し、T 村で見られる「債務を以て債務を返済する」意識を持つ村民は、儀礼を開催する直前に招待状を配る時、G 村のように村内外を区別することはしない。従って、主催側が儀礼的な付き合いの主導権を握るようになる。結婚、誕生日、新居移住、出産、大学入試合格などの出来事を契機として主催する儀礼のために配られる、赤い表紙の「招待状」は主催側の参列者動員の道具となり、「赤い罰金カード」（紅色罰款單）と呼ばれる。

しかし、儀礼的な付き合いの範囲は短期間には変わらないが、儀礼の主催コストは自己の優位を表現するために、絶えず引き上げられる。その背景において、単に「招待状」を配布するだけなら、「債務を以て債務を返済する」という自己救済の目標は達成できない。それで、G 村のような付き合いの段落に代わって、T 村で存在するのは「招待状」の背後における祝儀の金額引き上げの連鎖である。それは、すでに暗黙の前提となっている。以下の図は、この「引き上げ循環」を集約して示すモデルである。

B (参列者)	$x$ 元	→	A (主催側)
A (参列者)	$x + \alpha$ 元	→	B (主催側)
B (参列者)	$x + \alpha + \beta$ 元	→	A (主催側)
...	...		...

図 2：T 村における祝儀の金額加算の連鎖

出所：華中科技大学中国鄉村治理研究中心『調査資料集』に基づき筆者作成

そのため、「招待状」の参列動員メカニズムは、一時的に資金を抛出する役割を果たして主催側の「返済」の負担を減らせるものの、参列者としての数多くの村民にとっては、「過節」（春節など休暇期間を過ごすこと）は「過劫」（奪い取られる時期を過ごすこと）<sup>(37)</sup> となった。

### 3 個別農家の農外就業モデルと儀礼的な付き合いの「負担」

前述したように、都市近郊に位置する G 村における村民の農外就業モデルは「通勤兼業」である。経済的な実力に基づく儀礼の主催、儀礼的な付き合いに対する負債意識、寄贈者名簿に基づく儀礼の参列などの事象から、できるだけ儀礼的な付き合いの「負担」を制限する農民像が見て取れる。

それに対して、遠隔地に位置する T 村における村民の農外就業モデルは、ほとんど年に一回だけ帰郷する「出稼ぎ」である。自己優位の表現に基づく儀礼の主催、「債務を以て債務を返済する」意識、招待状に基づく儀礼の参列と祝儀の金額の加算連鎖などの事象から、儀礼的な付き合いの「負担」を制限せず、儀礼自体を利用して「負担」に対応する農民像が現れる。

農村社会における儀礼的な付き合いをめぐって、G村とT村の間にもろもろの差異が生み出されたのは何故か。村民の農外就業モデルと儀礼的な付き合いとは、どのような関連性があるのか。以下では、農外就業モデルが農村社会における人間関係に及ぼす影響に着目して、その問題を検討しよう。

通勤兼業をする農民にとって、業縁関係は村外に移出したが、毎日の仕事が終わると、帰宅の途中で、または帰宅してから、日常的な付き合いをする時間も少なくない。従って、本稿の冒頭で言及した「親密な人間関係」と「顔馴染み社会」は維持され、相手を熟知した人間関係は保たれる。G村のある農民は、「顔が腫れ上がるほど打って太った人になりすます」<sup>(38)</sup> といったことは、何の意味もない。本当のその人が裕福かどうか、端からみんな良く知っているよ！」<sup>(39)</sup> と筆者に語った。村民のこの一言は実に興味深い。村民同士が互いによく知り合っているので、経済的な実力を考えずに、「拱」の数量や煙草のブランドなどで自己の優位を表現するのは無意味な行動となる。なぜなら、自己顕示は他人の承認を得られて初めて価値があるからである。

T村においてしばしば見られるのは、経済的な実力を超えて、自己顕示を追求する面子競争である。実力は限られているが、他人より優位にあることを顕示して「面子」を得るため、付き合いの「負担」を考慮せず、儀礼の開催によって他人に見せる「拱」の数量と煙草のブランドなど、経済的な能力を象徴的に示すようになる。他人がそれらの象徴的な表現を実力の現れと見なし、「優位」の信憑性を疑わないゆえには、G村の通勤兼業とは異なる出稼ぎという農外就業モデルに関わっている。出稼ぎの農外就業は、もともと熟知し合った人間同士から成る「顔馴染み社会」を、村民が互いに見たところ、顔には見覚えがあるが、知り尽くしているわけではないという「顔見知り社会」へ転換させる役割を果たしたと言える。相手の経済的な実力を知らない場合、T村の儀礼的な付き合いで用いられる象徴的な表現は、実力の優位に関する証拠として承認されてしまう。このことが、面子競争を引き起こしている。

### 第三節 余暇生活の付き合い

人民公社時期、農民は生産活動を中心に暮らしていたので、余暇生活は非常に限定的であった。余暇生活の内容は、公社の広場に集まって放送隊が放映する映画を鑑賞したり、春節などの祝日の期間に親族または近隣の家を回って閑談したりすることであった。しかし、人民公社解体以後、農民の余暇生活には、それを①娯楽と見なす農村、②付き合いの「負担」と見なす農村、という二種類の様相が分化してきた。以下は、前節の比較を踏まえ、引き続きG村とT村の事例を取り上げ、麻雀遊びという余暇生活の手段に絞って、その二種類の様相を説明したい。

## 1 麻雀遊び：娯楽 vs. 博打

1970 年代、G 村が所属する生産大隊においては、少数の幹部が率先して「茶館」を開設し、麻雀の場所を提供していた状況が、上級幹部で組織される「検査団」によって発見された。その結果、当該生産大隊の幹部らは名指して批判された上で交替させられ、「修正主義」および「資本主義の道を歩む実権派」というレッテルを貼られることになった。

人民公社が解体して以降、集団的に組織された余暇生活は見られなかった。麻雀と「資本主義」は区別して考えられるようになったが、麻雀で遊ぶのに十分な資金を持つ村民は少なかった。

1980 年代末から、麻雀遊びの場所としての「茶館」が G 村の村民李 BH の自宅に開設された。そこでは、お茶を飲みながら麻雀に高じる 70-80 歳の高齢者の姿が見られる。高齢者にとって、賭けの対象と見なされるのは、5 分<sup>(40)</sup>の貨幣、または空豆であった。

2013 年の調査時点に、G 村の「茶館」は三つになり、それぞれ 2 角、2.5 元、5 元を賭けの対象として、高齢者、中年者、若者の集う場所となった。筆者が若者の集中地としての「茶館」で聞き取り調査を行う時に、「お金がなければ、多額の数取りを使わないほうがいい。経済的な実力に即してやるべきだ」、「我々は麻雀遊びを娯楽と見なしている。賭博ではない」、「麻雀テーブルの上に「面子」に基づく規定を設けない」<sup>(41)</sup>などの話をしばしば耳にした。

それに対し、帰郷期間の T 村村民における麻雀では、一日に数百元または千余元を勝負の代価とする博打が日常茶飯事である。麻雀の参加者としては、出稼ぎを始めたばかり、または数年の出稼ぎ経験を持つ若年世代の村民が多数である。彼らの月給は 3,000 元程度にすぎない。村民の王 SW は、2013 年の春節期間、帰郷してから一週間足らずで、麻雀遊びに負けて 2 万余元を失った。多大な経済損失を負った王 SW は、病に臥すかのように、一週間も寝込んだまま何もしない、と王の妻が語った。

村民許 Q は出稼ぎによる貯金をはたき、2013 年の春節に 2,000 元の電動麻雀機を購入した。電動麻雀機はシャッフルする時間を短縮するので、関係者を集めて一日に遊ぶことのできる局数も増加する。そのほか、現在の遊びの規則は簡略化されたので、1 局の時間も短縮され、日に 3 回、数日ないし十数日ほども連続して遊び続ける若者が多く見られる。

このような麻雀遊びは、人々を興奮の渦に巻き込み、必ずや悲喜こもごもの結果を引き起こさざるを得ない。最後の賭け金まですってしまう村民については、家計の負担が増加するほか、翌年に出稼ぎに出る負担も増加する。だが、T 村における人間関係の再生産を維持し続けようとするれば、春節期間の消費の要請は依然として存在する。こうして、毎年出稼ぎに頼って、余暇生活の付き合いから生じる「負担」を補わざるを得ない状況が T 村では生まれている。

では、G 村の村民が麻雀遊びを単なる娯楽の手段と見なしているのに対し、T 村の多くの

村民は自分の経済的な実力を考慮することなく賭博に打ち込んでしまうのはなぜか。以下では、この問題を検討しよう。

## 2 個別農家の農外就業モデルと余暇生活の「負担」

この問題の根源をさかのぼっていけば、儀礼的な付き合いを分析した前節と同様に、T村における村民の出稼ぎの農外就業モデルに帰着する。

出稼ぎの農外就業が盛んになってから、T村における人口の大部分を占める青壮年は家を留守にして農外就業に出た。春節前後に、彼らは一時帰郷し、短いながらも熱心に消費的付き合いの時間を過ごす。もともとの「顔馴染み社会」の日常的な付き合いを通じて次第に蓄積されてきた、冒頭に述べた「われわれ意識」は、農外就業のために薄くなったように見える。ところが、春節の雰囲気はにぎやかな活気に溢れていて、一年ぶりに会う村民たちも、相手が自分のことをよく知っているように改めて感じる。しかし、情感的な表現がもたらす活気溢れる情景は、短期間に醸成することが不可能であるばかりか、人為的に作り上げることもできないのである。

そこで最も一般的な余暇生活の過ごし方として、麻雀遊びが脚光を浴びることになる。それは、短時間で個人間関係を改めて親密化することができる方式でもある。何と言っても、賭博は余暇生活の雰囲気を盛り上げることができ、いかなる形の個人的な感情の基盤も必要がない。ただし、刺激の度合いは遊びの持続性に直接関わっている。半月だけの春節の期間において、余暇生活の付き合いに投入する金額は、遊びの刺激を生み出す手がかりである。活気溢れる雰囲気を維持し、余暇生活の付き合いを続けさせるためには、麻雀遊びの賭けの対象の金額を絶えず増加させていく必要があると言われる。と同時に、T村の「麻雀遊び」は、賭けの対象の金額を面子の等価物として、面子の序列を形成させる。異なった経済的な実力を持つ村民たちは、同じ面子の判定基準の下で競い合う。それによって、経済的な実力が低い出稼ぎ労働者は重い余暇生活の「負担」を負うことになる。余暇生活と前述した儀礼的な付き合いとが相俟って、出稼ぎの生産活動は、農村社会における付き合いの消費要請から生じる「負担」に従属することになった。

これに対して、通勤兼業をする村民が多いG村では、「顔馴染み社会」が維持されるので、T村のように麻雀遊びの刺激を追求する必要がない。経済的な実力に基づく付き合いを行うG村の村民の中で、「顔が腫れ上がるほど」(実力がないのに大物ぶる)高い賭け金を伴う遊び方で面子を求める者はほとんど見られない。G村の村民の言葉を借りるなら、「我々は「虚偽の面子」より「実力に基づく面子」を求める」<sup>(42)</sup>。言い換えれば、T村において「虚偽の面子」と「実力に基づく面子」のけじめをつけられない状況は、出稼ぎの農外就業モデルに関わる「顔馴染み社会」の「顔見知り」化が引き起こした結果なのである。

## おわりに

本稿は中華人民共和国建国以来の、農村社会における付き合いの変遷、または農外就業モデルと付き合いの「負担」との関係を考察した [表 3]。

農外就業モデル 農民の付き合い		集団的な農外就業 (G 村の例)	個別農家の農外就業	
			通勤兼業 (G 村)	出稼ぎ (T 村)
日常的な付き合い		村内	村内+村外	村外
非日常 的な付 き合 い	儀礼的な付き合い	生産活動に奉仕する	実力重視, 負債意識	優位重視, 借金意識
	余暇生活 (麻雀の例)	麻雀遊びの厳禁	面子を講じない娯楽	面子序列化の賭博
農村社会における 付き合いの「負担」		生産能力を超過する付 き合の消費要請はない	付き合いの消費要請 を制限する	「負担」を制御しな い。

表 3 : 農外就業モデルと農民の付き合い

出所 : 筆者作成

人民公社時代、「亦工亦農」制の実施によって、農民の集団的な農外就業は一般に末端の生産隊に限定された。それから、農民の「農外就業に基づく付き合いの範囲」、「集団的農業生産に基づく付き合いの範囲」、「日常的な付き合いの範囲」、「儀礼的な付き合いの範囲」という四つの圏域は累積し、生産本位の労働配置と収入配分制度に組み込まれた。「儀礼的な付き合い」は「生産の互助」という生産志向の付き合いの一部分となっていた。消費志向の付き合いは生産志向の付き合いに従属したので、農外就業を含む集団的な生産は生産者同士の連帯感をいっそう強めた。付き合いを「負担」と捉える農民は存在しなかったと言える。

人民公社が解体して以降、農民の集団的な農外就業に代わって、小家族の兼業経営を背景とする家族構成員の個別農家の農外就業が盛んになった。個別農家の農外就業の動機を考察すれば、農民を二種類に分類することができる。一つは、都市部に移住して市民化を目指す、資本蓄積型の農外就業である。もう一つは、農村社会における人間関係の再生産を目指す、「付き合いの消費」を志向する農外就業である<sup>(43)</sup>。農外就業により最後に都市部に移住した数少ない農民は、農村社会の付き合いから徹底的に退出することができるが、未婚の若年世代にとっては、農村社会に残るか、または城鎮に移住するか、という問題の選択は保留状態に置かれる。保留とはいえ、若年世代は農村社会での付き合いを気にかける。結局のところ、資本蓄積型の農外就業をする若年世代の農民も、農村社会における人間関係の再生産を無視することができない。

本稿はさらに、農民の農外就業モデルを通勤兼業と出稼ぎという二つの形態に分けて、



都市近郊の農村と遠隔地の農村における村民の付き合いを検討した。都市近郊の農村においては、通勤兼業の村民が毎日帰宅するので、互いに知り尽くした関係の「顔馴染み」の農村社会が存続している。それ故、村民は付き合いの「負担」を制限しながら、こつこつと着実に家庭経済水準を高めることによって「面子」を得ようとする。

遠隔地の農村にとって、農外就業している村民は頻繁に帰郷できる条件がないので、春節などの祝日をきっかけに帰郷する場合が多い。このような出稼ぎの農外就業モデルは、農村社会の付き合いを「顔馴染み」から「顔見知り」に移行させる結果をもたらした。「顔見知り」社会になったため、自己優位の虚像を以て面子を得ることが可能になり、熟知した同志関係を前提としない、刺激を与える余暇生活によって弱体化した個人関係を維持することが必要となった。結局のところ、出稼ぎは農村社会における付き合いから形成された「負担」に奉仕する存在になったのである。

なお、本稿が論述したのはそもそも宗族勢力が強くないG村とT村の事例である。宗族勢力が強い社会構造を持つ農村における付き合いの変遷、または農外就業と農村社会の付き合いとの関係についての検討は、今後の課題としたい。

#### [注]

- (1) 福武直「中国農村社会の構造」, 同『福武直著作集』第九卷, 東京大学出版会, 1976年6月(初刊: 福武直『中国農村社会の構造』大雅堂, 1946年10月), 260頁。
- (2) 古島和雄「旧中国における土地所有とその性格」, 同『中国近代社会史研究』研文出版, 1982年11月。
- (3) 河地重蔵『毛沢東と現代中国: 社会主義経済建設の課題』ミネルヴァ書房, 1972年1月。
- (4) 費孝通『郷土中国』北京: 生活・読書・新知三聯書店, 1985年6月, 29頁。
- (5) 同上, 10頁。
- (6) 花澤聖子「近代化政策下における中国農村社会の「差序格局」」『神田外語大学紀要』第22号, 2010年3月, 33頁。
- (7) 陳柏峰『鄉村江湖: 兩湖平原「混混」研究』中国政法大学出版社, 2010年8月, 13-15頁。
- (8) 「職業」と「身分」の二つの視点から「農民」を定義する説がある。「営利事業としてではなく、生計の手段として農耕に従事する、土地を効果的に管理している農業生産者」(エリック・ウルフ著/合田博子訳「メソアメリカと中部ジャワの閉鎖的農民共同体」, 松園万亀雄編『社会人類学リーディングス』アカデミア出版会, 1982年6月, 243頁)と定義される「農民」の概念は、「職業」という特徴に注目し、英語の“farmer”という概念に近い。ただし、本論は「身分」の視点から、「農村戸籍を有している人々」という英語の“peasant”に近い概念の定義を用いて「中国の農民」を捉える。中華人民共和国建国以来、国営農場の労働者は一般に非農業戸籍を有していたが、各生産隊の動員により、集団的に公社の基礎建設または副業経営など非農業生産に従事する農村の住民は、農村戸籍を有していた (Jeremy Brown, *City versus Countryside in Mao's*

China, New York: Cambridge University Press, 2012, pp. 169-99)。多数の事実からすれば、「農村戸籍」を有するかどうかという点を拠り所に「農民」の概念を捉える方法は、中国の経験にも適用可能であると言える。

- (9) 楊華『農村人情の性質及其変化』『中南財經政法大学研究生学報』2008年第1期, 41-44頁。
- (10) 中国社会の文脈における「人情」は、日本社会において人々ができるだけ避ける行為としての「借りを作る」や「貸しを作る」ことの中で、「借り」と「貸し」の具体的対象(例えば、労働力、お金など)を総括・抽象した結果成立した上位概念であると言えよう。
- (11) ここでの結論については、聶莉莉(1954年生)の『劉堡：中国東北地方の宗族とその変容』(東京大学出版会, 1992年7月)の中で取り上げられた事例を参照できる。聶莉莉は劉堡という村落において「先住者と移住者との間の日常の付き合いレベルのギャップが目立っている」(30-31頁)という特徴を指摘している。
- (12) 宋麗娜『人情的社会基礎研究』華中科技大学博士学位論文, 2011年6月, 92-95頁。
- (13) Yan Yunxiang, *The Flow of Gifts: Reciprocity and Social Networks in a Chinese Village* (Stanford, California: Stanford University Press, 1996)の第7章, とりわけ169-75頁を参照。
- (14) 鳥越皓之『家と村の社会学』増補版, 世界思想社, 1993年11月, 52-60頁。
- (15) 山口睦『贈答の近代：人類学からみた贈与交換と日本社会』東北大学出版会, 2012年12月。
- (16) 通過儀礼とは、人生の節目を通過するに際して、その平安を保障するために行われる一連の儀礼である。中国の農家の場合、周歲酒(満一歳を祝う宴会)・満月酒(生後満1か月を祝う宴会)・15歳の「出童冠」を祝う誕生日の宴会・冠婚葬祭の祝いなどが、人々が客を招き行わなければならない通過儀礼とされる。それらの年齢は人生の「節目」とされるので、夭折しないためには、それらの祝いをきちんと行った方が良いと考えられている。
- (17) 1958年12月の武昌決議では人民公社の欠陥や混乱が指摘された。1959年3月の鄭州会議で、公社の単一所有制を公社、管理区、生産隊の「三級所有制」に改めるとともに、旧高級生産合作社に相当する生産隊(地区によっては生産大隊)が基本的な所有制単位とされるという議案が提出された(小林弘二『二〇世紀の農民革命と共産主義運動：中国における農業集団化政策の生成と瓦解』勁草書房, 1997年11月, 413頁)。同年8月の廬山決議(「關於開展增產節約運動的決議」)では人民公社の「三級所有制」が規定された。生産小隊は元の高級生産合作社の生産隊に当たるものである。この「三級所有制」は1961年3月、最初の草案として全黨員宛に下達され、1962年9月に最終の草案として公布された「農村人民公社工作条例」(略称「農業六〇条」)によって修正された。その後、生産大隊の規模は一般には旧高級合作社の規模と同等であるべきで、生産隊(元の生産小隊、地理的にはほぼ自然村(集落)と重なる)の規模は20-30戸が適当だとしている(前掲書, 473頁)。人民公社が解体した時期の「村民小組」は、1962年以後に固まった公社—生産大隊—生産隊の三級からなる「生産隊」に該当する。
- (18) 1946年から1949年までの国共内戦期に華北地区で「均分主義」を原則に、また1950年から1953年まで華中、華南のいわゆる新解放区で「富農經濟保存」を原則に、それぞれ遂行された土地再分配を言う。
- (19) 『中国の工業化と農業問題』国立国会図書館調査立法考査局, 1965年3月, 27頁。

- (20) 小林一穂「中国農村家族の変化と安定：山東省の事例調査から」<sup>しゆとうとしかず</sup>、首藤明和・落合恵美子・小林一穂編『分岐する現代中国家族：個人と家族の再編成』明石書店，2008年3月，295頁。
- (21) 中兼和津次「亦工亦農制度：江蘇省供銷合作社の例」『アジア経済』第7巻9号，1966年9月，112頁。
- (22) 嶋倉民生・中兼和津次編『人民公社制度の研究』研究双書297，アジア経済研究所，1980年10月，51-52頁。
- (23) 常德市G村が当時所属していた生産大隊は，排水条件を改善するために，「園田化」と呼ばれる建設計画を制定した。その計画により，G村を含めた生産大隊全域の施設分布枠組は，排水溝と道路に囲まれた600平方メートル程度の基盤の目状に従って再編成された。住宅分布も，画定されたある地域に集中すると計画された。その結果，道路に沿って再建された宿舍式の集合住宅群は「居民点」となっていた。
- (24) 1953年から，農村部において合作社化と食糧統制は一体として推進された。合作社化（「合作化」）は初期合作社化（初期合作社を組織すること）と高級合作社化（高級合作社を組織すること）を含む。食糧統制は「統一買付・統一販売」（「統購統銷」）制度の導入を通じて実現された。地区によっては幹部が買付量の超過達成を競い合う情況も見られた。詳細は，小林弘二『二〇世紀の農民革命と共産主義運動』の第三章を参照。要するに，食糧統制は閉鎖的な人民公社の社会分化を制御する役割を果たす一方，農家を単位とする実質的な消費量をも抑制することになった。
- (25) 湖南省常德市G村での聞き取り記録（2013年7月19日，23日，24日）に基づく。
- (26) 小林弘二編『中国農村変革再考：伝統農村と変革』研究双書363，アジア経済研究所，1987年12月，3頁。
- (27) 「出稼ぎ」は，収入を得るために一定期間居住地を離れて就労することを指すが，一般には農家農外就業を意味する（佐々木毅・鶴見俊輔・富永健一・中村政則・正村公宏・村上陽一郎編『戦後史大辞典：1945-2004』増補新版，三省堂，2005年7月，628-29頁）。また，帰属性を有する「一時的離村形態」というのは，永久離村や，毎日家から通勤する（通勤兼業）といった形態を除外するものである。詳細は大川健嗣『出稼ぎの経済学』（精選復刻紀伊國屋新書，紀伊國屋書店，1994年1月，初刊は1974年8月），6-8頁を参照。
- (28) 「孫子9歳了，満月之後一直沒整酒。3歳，6歳，9歳，沒条件就不辦。」湖南省常德市G村村民楊NFに対するインタビュー記録，2013年7月13日。
- (29) 「客人只要一一直在「拱」下面走，就能走到他家門口。」湖南省常德市G村村民楊CBに対するインタビュー記録，2013年7月12日。
- (30) 華中科技大学中国鄉村治理研究中心『2013年調査資料集』，湖南省常德市桃源県T村。
- (31) 同上。
- (32) 「大家好像都在比著擺，比別人的拱多，才能更有面子。」華中科技大学中国鄉村治理研究中心『2013年調査資料集』，湖南省常德市桃源県T村。
- (33) 「在這樣子你来我往的時候，有時候真是身不由己啊。可是人活着，「面子」是必須要的。有時候這也是對我來說的一個「負擔」，可是如果你聽見有人說你比別人強，你肯定還是感到高興嘛！」華中科技大学中国鄉村治理研究中心『2013年調査資料集』，湖南省常德市桃源県T村。
- (34) 「不把人情搞大了，不要弄到最後不可收拾。」湖南省常德市G村村民姚DYに対するインタビュー

一記録, 2013 年 7 月 15 日。

- (35) 「三年不辦窮光蛋。」華中科技大学中国鄉村治理研究中心『2013 年調查資料集』, 湖南省常德市桃源県 T 村。
- (36) 人民公社が解体して以降, 生産隊 (後の村民組) を単位とする集団的な生産活動, または日常的な付き合いの集団性はほとんどなくなったが, 儀礼的な付き合いに限ると, 今なお生産隊の痕跡が残っている。「儀礼の主催者と同じ村民組に所属する若者は, お金を借りてでも「人情」を發揮して儀礼に参列する必要がある。さもないと, 村の世論から悪い評価を受けることは避けられない」(組内の年輕人借錢也必須赶人情, 年輕人不去, 別人就要講。」湖南省常德市 G 村村民姚 F に対するインタビュー記録, 2013 年 7 月 17 日) という G 村における村民の証言はそれを裏付ける。
- (37) 中国語で「節」と「劫」の発音は同じ, “jie” である。
- (38) 中国語は「打腫臉充胖子」であり, 「実力がないのに大物ぶる」という意味がある。
- (39) 湖南省常德市 G 村村民姚 QD に対するインタビュー記録, 2013 年 7 月 15 日。
- (40) 中華人民共和国では, 独自の通貨として「元」yuan, 「角」jiao, 「分」fen が使用されている。1 元は, 10 角, あるいは 100 分である。
- (41) 「沒錢不消打大牌, 要量体裁衣。」「這是娛樂, 不是賭博。」「牌桌上无所谓面子。」湖南省常德市 G 村「茶館」の聞き取り記録, 2013 年 7 月 21 日。
- (42) 「我們好的是實面子, 不是虛面子。」湖南省常德市 G 村「茶館」の聞き取り記録, 2013 年 7 月 21 日。
- (43) 賀雪峰「農外出務工的邏輯」(同『鄉村社会關鍵詞』山東人民出版社, 2010 年 8 月, 5-20 頁) を参照。